

Title	ベルクソンの哲学的生命観IV
Sub Title	Bergson's philosophy of life IV
Author	星野,慎吾(Hoshino, Shingo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1992
Jtitle	哲學 No.93 (1992. 1) ,p.309- 330
JaLC DOI	
Abstract	This paper is the continuation of "Bergson's Philosophy of Life I, II, III". In "I" his own original view of philosophy has been explained. In "II" and "III" we have discussed his philosophical solutions for physiological problems of life. In this paper biological problems of life are discussed from Bergson's own philosophical point of view, especially his philosophical interpretation of evolutions of life. Bergson rejects interpreting the evolution of life teleologically and mechanically, but favors to understand it in his own sense of teleology.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000093-0309

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンの哲学的生命觀 IV

星 野 慎 吾*

Bergson's Philosophy of Life IV

Shingo Hoshino

This paper is the continuation of "Bergson's Philosophy of Life I, II, III". In "I" his own original view of philosophy has been explained. In "II" and "III" we have discussed his philosophical solutions for physiological problems of life.

In this paper biological problems of life are discussed from Bergson's own philosophical point of view, especially his philosophical interpretation of evolutions of life. Bergson rejects interpreting the evolution of life teleologically and mechanically, but favors to understand it in his own sense of teleology.

* 慶應義塾大學理工學部助教授

「ベルクソンの哲学的生命観 I⁽¹⁾」では、ベルクソン獨得の哲学観が考察され、「同 II⁽²⁾」および「同 III⁽³⁾」では、その哲学観に基づいて展開された独自の哲学である、生命の哲学における生理学的観点からの哲学的问题についての論考が示された。本論文では、生物学的観点から生命の問題を扱かったベルクソンの哲学について論ずる。特に本編では、その問題については生命の進化の解釈の問題に焦点を合わせて哲学的に究明されてい る。

ベルクソンの哲学的生命観

(II) 生物学的観点からの問題

1

ベルクソンがこれまでに明らかにしてきたように、自己の真実相である意識にとっては、存在することは変化することであり、変化することは成熟することであり、そして成熟することは限りなく真に自己自身を創造することであった。そしてそれこそがまさに、ベルクソンが持続と名付ける実在の真実相の存在様態にほかならないのである。しかしへルクソンにおいては、このような存在様態はたんに意識的な自己にのみ固有のものとして発見されているだけではなく、さらに意識的な自己をそのなかに含んでいる全宇宙そのものが、ここで述べた意味でとまったく同様に持続するのである。しかもただに宇宙のみではなく、この宇宙のうちに生きる個々の生物もまた同じように持続するのである。

森羅万象をそのうちに包含している全宇宙が持続している、というベルクソンの観得はたしかに近代の自然科学の見方とは齟齬をきたすことになる。と言うことは、科学が変化し成熟し持続する対象を研究する場合には、それらの対象をもろもろの不变な部分に分割していき、究極において絶対

に不変と考えられるもろもろの部分の変位（位置の移動）によって、一切の変化を説明しようとするからである。たとえば、分子、原子、そして原子を産出する素粒子、さらにはまたその渦動によってこの素粒子を形成する不可量的なものといったようにしだいに分析を進めて行って、最終的には絶対不変のもろもろの部分の位置の移動によってあらゆる現象の変化を再構成する、という方法を科学は用いるからである。そしてさらに科学は、たとえ一つの部分がその現在の位置を離れ去り移動したとしても、それが再び元の位置に戻ることが妨げられることは何もない、という立場に立脚してその探究を前進させるのである。したがって、一つの状態を経過した諸要素のそれぞれは、原理上、再びその各々の元の状態に立ち戻ることができるとして扱かわれるわけである。このことからして科学では、それら諸要素の一群はその一つの状態にいく度でも戻れる、言い換えれば一つの状態はいく度でも反復されることが可能である、ということが前提されているのである。それゆえ厳密に言って、科学で扱かわれる諸要素には老化という経過が、存在しないということが含意されている。すなわちそれらは真の歴史を持っていないのである、とベルクソンは指摘する。このことは、科学で扱かわれる時間には真に創造的な意義が見落されてしまっているのであって、そこで時間は流れた時間であって、たんに個々の対象がそのなかで経過し反復する同質的空間であるに過ぎないことを意味している。もともと本来の真の時間とは、ベルクソンが発見したように流れる時間なのであり、意識的な自己においてのように時間の一瞬一瞬が対象そのものに喰い入り、それに拭うべくもなくその歯型を残すものであったはずなのである。

しかし、科学が時間を同質的空間と想定するのは、それが一つの相対的立場に立ちそして相対的な記号を援用せざるを得ない認識をよぎなくされるからであり、しかもさらにそこで考察されている物質的対象が宇宙の全体から切断され孤立させられている一つの閉鎖的体系として処理されざる

を得ないからなのである。事実、すべての科学は多少ともに、その研究対象の範囲をそうした閉鎖的体系として考察することによって、はじめて成立が可能なのである。いかなる科学であっても、全宇宙をそれがあるがままの具体的な姿や風貌のままで捉えることは不可能である。したがって、科学によって全宇宙から切断され、孤立化されて抜き取られた任意の閉鎖的体系は、もともと抽象的なものであることを免がれず、眞の实在ではあり得るはずのないものなのである。それゆえ、そのような体系は確かに一応のところ眞の流れる時間に無関係なもの、反復され得るもの、創造的歴史を持たぬもの、持続しないものと考えられるのは当然の成り行きである。しかしそのことを敷衍して、全宇宙もまた同じように創造的な歴史を持たぬもの、持続しないものと考えることは到底許されないし、事実無根であるとベルクソンは主張するのである。

たしかに、科学が或る一つの系を孤立させ閉ざす操作は、かならずしもまったくの人為的な操作であるわけではない。もしこの操作が客観的な根拠をもたないならば、或る場合にはこの操作がまったく適宜であるのに、他の場合には不可能だという理由が理解できないであろう。物質はそもそも孤立的な系を構成する傾向をもっており、この系は幾何学的に処理される。われわれが物質を定義するのは、まさにそういう傾向によってであるが、しかしそれは一つの傾向でしかない。物質は極限まで進みはしないし、完全な孤立も決してあり得ない。一杯の砂糖水をこしらえようと思うときには、われわれはとにもかくにも砂糖が水に溶けるのを待たねばならない。われわれが待たねばならない時間は、われわれの待ちどおしさ、言い換えれば、思いのままに伸縮され得ないわれわれ自身の持続の或る一部分と一致するのである。その時間はもはや思考される時間ではなく、生きられる時間であり、一つの関係ではなく絶対的なものである。科学が極限まで進み完全に孤立させるのは、研究の便宜のためである。いわゆる孤立した系がやはり若干の外的影響を蒙っていることは、科学もこれを

暗に認めている。科学はただそれらの影響を脇へとけておくだけである。それらの影響は非常に微弱なので無視してもかまわない、と科学が考えるからであり、あるいはまたあとで考慮に入れるつもりで科学が保留しておくからである。にもかかわらずこれらの影響が、当の系を他のより広い系に結びついている系であるというのは真実である。この系はさらにそれら二つの系とともに含む第三の系に結ばれる。かくしてついには、最も客観的に孤立した系でありすべての系から最も独立している系、すなわち太陽系全体にたどりつく。しかしここに到っても孤立は絶対的ではない。太陽は最も遠い惑星のかなたにまで熱と光を放射しているし、他方またもろもろの惑星とその衛星をしたがえて一定の方向に運動している。このように順次つながったこの系に沿って、われわれの生きているこの世界の最も微細な部分にまで、宇宙全体に内在する持続が伝わってくるのである。

かくして宇宙は持続するのである。持続とはベルクソンによれば、それは不斷の発明であり、もろもろの形態の創造であって、絶対に新たなるものの連續的形成を意味する。そして宇宙全体はこの意味での持続をその本質としているのである。しかし、われわれの感覚や知覚とそれらに基づく科学とは、われわれの行動の必要のためにという理由から、この持続する創造的宇宙全体のなかから任意に、さまざまの孤立的閉鎖的体系を切断して抜き取るのである。なぜならそうすることは、行動の立場にとって必要不可欠の手段であるからである。われわれは行動するためには、対象を一応不变不動のもの、あるいは反復し得るものにまで切断し抜き取って孤立させ、固定することを余儀なくさせられる。しかし、それはあくまでも行動にとっての必要からであって、実在の真実相の認識のためではない。実在は持続するのである。それゆえ、感覚や知覚によって限定される諸対象や、そして科学の抽出し析出した閉鎖的体系も、われわれが空間の或る一点に及ぼすことができる或る種の影響力の素描にほかならないけれども、ひとたびそれらがその属する元の全宇宙のうちに積分されるならば、必ず

や再び持続するものとして観得しなおされるであろう。

さて、宇宙が持続するものであるのと同様に、しかもそれと同じ仕方で個々の生物や有機物体もまた持続することは明らかである。なぜなら生物や有機物体が無機物質とひとしく宇宙の一部分であるとしても、両者は同じではないからである。無機物質は科学によって無理に孤立化させられたものであり、科学の立場や操作に相対的であるのに反して、もちろん生物体もまた拡がりの一部をなし、この拡がりは残りの拡がりと結びつき、全体と連帶関係をもつていて、物質のどの部分をも支配している同じ物理的、化学的諸法則にしたがっているけれども、生物体はいわば自然そのものによって分離されていて、同時に孤立化され閉ざされているものであると見られねばならないからである。さらに生物体は異質な諸部分からなり、それらの部分は互いに補足し合っておりまた互いに連関するさまざまな機能を営む。つまりそれは一個の個体なのである。個体性には無限の段階があり、それはどこにおいても完全には実現されていないので、それが個体でありそれが個体でないかを言うことは、しばしば困難でありときには不可能であるけれども、生命はやはり個体性の追求を示しており、自然的に孤立し自然的に閉ざされた系を構成する傾向があると言える。かくして生物体は、われわれの知覚ないし科学が人為的に孤立させ、あるいは閉ざすいかなるものとも区別されているのである。無機物質はたしかに或る程度まで、無限に反復可能な微粒子的要素の集合体として考察されることが可能である。それは、現在は過去よりもより多くの何ものをも含まず、したがって結果のうちに見いだされるものは必ず原因のうちにすでに存在している、という至極単純な法則によって支配されていると見なされているのである。ところが有機物体においてはそうではない。それはたんなる要素の集合と見られることもできなければ、また無限に反復可能なものであるとも考えられない。たとえ分析的な知性の立場から、そこにさまざまの要素が見い出されるにしても、しかしそれらの要素から成る全体そのものは、決して

要素に還元されることのでき得ぬ一つの形態、独自の具体的形態を伴っていることは否定され得ない明白な事実である。そしてこの形態は不变のものでもなければ、同様に反復可能なものでもない。すなわち有機物体は不斷の生成であって、その意味味ではそれは意識と同じく、また全体としての宇宙と同じく持続を持っているものである。一言にして言えば、それは創造的である。一個の生物は、生れ、成長し、成熟し、そしてやがて老衰して死に帰するのである。生物は未来を嗜じり、前進しつつ膨らんでゆく過去の連續的な進展であること、すなわち生物にとってもまた、存在することは時間の歯型を受けることを意味するのである。ベルクソンは、およそ何ものかが生きているところには時間の記入される帳簿がどこかに開かれている、と述べている。だから生物を物質的対象と比較するのは間違っている。もし無機物のうちに比較相手を探そうとするなら、われわれは生きている有機体は特定の物質的対象とではなく、むしろ物質的宇宙の全体にこそ比較されるべきである。少なくともそうすることによって、われわれの注意は有機体の本質的な特徴に向けられることになる。全体としての宇宙がそうであるように、また個別的に取り上げられた個々の意識存在がそうであるように、生きている有機体は持続するものである。この有機体の過去はそっくりそのまま現在のなかにまで延長し、そこに現実的に活動している。そうでないならば、有機体が規則正しい種々の相を経過し、その年齢が変わり、要するにそれが一つの歴史を持つということをどうして理解できるであろうか。

宇宙および生命的存在が持続するのは明確である、とベルクソンは説く。もとより持続するものはただ直観を用いることによってのみ觀得され得るのであって、たんに既成の概念を駆使するだけでは捉えられるものではない。既成の概念は、言ってみれば或る特定の身体に一分の隙もなくぴったり合うように作られた詫えの洋服ではなく、不完全ながら大体どのような身体にも向くようによく作られた出来合いの洋服にほかならないからである。

古来多くの人々は、われわれの知性が提供する既成の概念を適用して、持続する宇宙および生命を把握しようと努力してきた。こうした試みの一つのものは機械論であり、そしていま一つのものは目的論である。

機械論的説明はわれわれの知性に依存して世界を見渡すのであって、現在は過去以外のものを含まず、結果にあるものは必ず原因のうちに存在する、という原則に基づいている。もし未来が予言できるとすれば、それはただ過去と類似するものまたは要素が過去のそれと共に通なものののみについてであろう。天文学や物理学、化学は未来を予測するけれども、そこで問題となるのは不变とみなされた要素の配列の変化だけであって、つきつめればそれは位置の変化のみに注意を集中するに過ぎないのである。機械論的説明はつまるところ決定論的説明に到るものであって、それはわれわれが全体としての宇宙から人為的に切り取って抜き出してきた諸体系には十分に或る程度までは妥当するであろう。しかし全体としての宇宙そのもの、およびその全体の像に似せて自然的に形成されている諸体系（生物）に関しても、機械論的説明が同じように適用できるとする明白でア・プリオリな根拠が存在するのであろうか。生命はつねに新たなるものを加え続けて行くのであるから、当然そこには新しいものが生まれるためにには原因が存在する。しかし、その原因を示し得るのは結果が生じて後のことであって、それは後からの説明に過ぎず、原因から結果を予測することはできないのである。ところが知性は生命を創造的なものと考えないので、予知できぬものとは思っていない。それは生命が非創造的なのであるからではなく、知性がそもそもそのような見方しかできないということに基づいているのである。知性はわれわれの行動のために、未来の活動の準備のために反復し得るもの、未来のうちで既に現在のうちに存在しているもののみに注目することをその本質にしているのである。このような立場からすれば生命が決定論的および機械論的に理解されるようにならるのは当然である。しかしその場合には眞の時間である、流れる時間は不要のもの非実在的な

ものとされて考慮の外に放逐されてしまっているのである。これまで学問的に機械論的な立場に立って、生物の変異の事実すなわち生命の進化がさまざまに説明されてきている。それらの諸説はおおよそ、(1) 純粹な偶然変異説と、(2) 外的影響による変異説とに分類される。そして (1) はさらに、(a) その偶然による変異は徐々に行なわれるとする立場（たとえばダーウィン）と、(b) それが急激な突然変異によるものとする立場（たとえばド・フリース）に区別される。

(a) の立場ではつぎのことが重要視される。元来有機体というものはその諸部分が互いに有機的に結合し、関連づけられているもので、もしその一部分だけが変化すれば、全体は破壊されるかあるいは調和が乱されて生存が危うくなるという難点を持っている、という点である。したがって、(a) の立場ではそのような弊害を除去するために、生体の変異は徐々に起こり、自然選択のメカニズムに左右されてそれは保存される、と説明する。その代わり生体に或る変化（進化）が成就するに到るまでには、非常に多くの回数の変異が起こることが必要になる。しかも変異の回数はたんに非常に多いだけでは不十分で、その上さらにそれは一つの順序に従って起こることが要請される。しかし幾千幾万の微細な変異が整然と一つの狂いもなく或る順序に従って生起する、ということは機械論の立場に立つ (a) の説では、奇蹟でも考えなければそれは説明し得ないことであろう。それに対して (b) の主張は、急激な突然の変異を最初から承認する立場であるから、(a) におけるほど変異の度数は頻繁である必要はないであろう。しかしそうであるだけに今度はそれ以上に、急激な変化をしながらもどうしてなお今まで通りの有機体の機能が齟齬をきたさずに保存されるのか、という問題が生ずる。たとえば、視覚器官の或る部分が突然の急な変化を起こしたのにもかかわらず、どうして視力は元のままであり得るのかということである。あるいはそれは偶然的な一つの幸運であったと考えるのであろうか。しかし急激な変異のたびごとに、幸運というものが幾度も繰り返

されたと考えるのは、目的論を許し何か内的な統一原理を認めぬ限りは承諾し得ないことであろう。ことに発生学的にまったくの別系統にあるものに同じ器官が生まれるということは、説明に困難をきたすところである。そしてさらに、ここでは別系統のそれぞれにおいて部分と部分の相関的変化ということが問題となるのであるから、それら相互の相補性を認めることは偶然説を排除することであろう。したがって偶然変異説は、(a)の場合では多くの変化を連續させるために、そして(b)の場合では多くの変化を一つに集中統一させるために、何んらかの内的な統一原理（目的性）を無意識のうちに想定していると言えるだろう。

つぎに(2)の場合の変異は外的影響によって起こると主張する立場については、外部からくる偶然的な力が異なる別々の進化の途上で生じた類似的諸要素を、まったく同じように一つの狂いもなく排列するということは、事実として起こりそうもないしまた考え難いので承認するのは困難である。それに實際問題として、生物の器官たとえば眼はたんに受動的に働くものではなく、能動的な働きをするものなのである。眼が光によって作られるということと、眼が外部のものを見るということの間には、写真と写真機の相違にも等しい差異が存在する。眼がますます複雑になってゆくことは、物質に対する光の極印がますます深く広くなってゆくことであるとも言えるであろう。けれども眼の機能はたんなる外部からの極印だけによるものではあり得ない。眼はその機構の下に外界へ能動的に働き返す、という作用が存在するのである。すなわち眼には働きが存在するのである。普通ひとはあるいは眼ができたから見るのであって、眼は見るために造られたのではないと考えている。しかし眼が見るとはたんに眼だけの事柄ではあり得ず、視神経は相互に連関する大脳中枢を経て他の運動器官全体に關係し連動していることは重要であり、見逃されてはならないのである。眼が見るのは取りも直さず、生物体が一つの全体として外界に働きかけることを目的とするためである。眼が見るとはたんに身体の一部分に過ぎな

い眼だけの問題ではなく、身体全体にかかる事柄なのである。実際問題として、ただ日光の影響だけで眼も含めて神経系や筋肉系や骨骼系が作られるはずもないであろう。

生物体やその部分の形成もすべて物理的化学的に説明可能であるとする立場の人たちは、生物の変態も外的作用の内部に及ぼす影響によるものであって、それらの外的影響はいつも生物を同一方向に変化させると主張する。たとえばタテハ蝶春型とタテハ蝶夏型のように、蛹に加える熱の温度の差が二種類の蝶を発生させるようにである。しかしここで注意しなければならないのは、原因という概念の意味であって、ベルクソンは實際にはそれに三つの違いを峻別する必要を説いている。原因が作用する場合にも、(ア) 衝撃によるものすなわち強制と、(イ) 発端によるものすなわち爆発と、(ウ) 展開によるものすなわち解放との三種類が区別され得るのである。(ア) はビリヤードの球をもう一つの球に突き当てるとき、その衝撃によってあの球の運動がひき起こされる場合のように、結果の量と質は原因の量と質によって決定される強制のケースである。(イ) は火花が火薬の爆発を誘発するのは発端による作用であって、結果の量と質は原因のそれらに依らぬケースである。(ウ) はゼンマイが徐々にゆるんで蓄音機がまわると、蠟管に録音されていたメロディーが解放されて展開するケースであって、結果の量は原因の量に依存するが、原因是結果の質に影響を及ぼすことではない。したがって実のところ、原因がその結果を説明するというのは、(ア)の場合にのみ正しくは言えることであっても、(イ) および (ウ) の場合には結果は多かれ少なかれあらかじめ与えられており、ここで拠りどころになっている前件は結果の原因であるよりも、むろんその程度はさまざまであり得るが、むしろその機會なのである。であるから、ある種の蛹が蝶になるときその羽根の色や模様がどうなるかは、気温の高低によって決定されると言う場合には、原因という言葉は (イ) と (ウ) との中間で使用されていると解されている、すなわちその因果関係は展開と発端と

の中間にあるものの意味としてとられているのである。さらに言えば、軟体動物の眼は脊椎動物の眼と同じ化学的成分をもち得ないということ、軟体動物の方向に進化した有機物質は、脊椎動物の方向をとった有機物質と化学的に同一ではあり得なかったが、それにもかかわらずこの二つの場合に、光の影響で同一の器官が造られたということは、常識的に考えても理解できぬことである。一般的に言って、それぞれに無数の小さな原因が累積しての結果である二つの異なる体系が、同じ結果を生ぜしめるということは、機械論的哲学の抛りどころとする諸原理にいかに反しているかは明白になってくることであろう。

以上は系統発生論から引いた一例について述べたのであるが、このことには個体発生論の提供する諸事実も、それに劣らぬ有力な証拠になるのである。たとえば、人間の眼の網膜と帆立貝の網膜は発達過程はまったく別のものであるにもかかわらず、でき上ったものはすこぶる類似しているのである。しかし脊椎動物の網膜は、幼胚における脳のきざしが外に伸びて生じたものであって、つまりそれはまぎれもなく神経中枢そのものが外辺部に伸びてできたものである。反対に、軟体動物の網膜は外胚葉から直接出てくるのであって、胚の脳を介して間接に生じるのではない。したがって、人間と帆立貝では異なる進化過程が同じ網膜の発生に到っていることになる。けれども、それらのように互いにこれほどかけ離れた二つの有機体を比較するまでもなく、同じ一つの有機体についても再生というまことに奇妙な事実を研究するだけで、同様の結論が得られるのである。イモリの水晶体は剔出されると虹彩膜から再生するが、本来は元の水晶体は外胚葉から形成されたものである。しかし、虹彩膜はもともと中胚葉から出たものなのである。さらにサンショウ魚においても、虹彩膜を痛めないようにして水晶体を取り去ると、虹彩膜の上部からやはり水晶体の再生が起くる。しかし虹彩膜の上部そのものを取り除くと、再生はその残存部分の内層あるいは網膜層に現出する。このことは要するに、位置も組織構成も

それぞれ異なり、その正常のときには異なる機能を果たすさまざまな部分が、このように同じ補助役をつとめ必要に応じてその器官の同じ部品を作ることができるということである。一言で言えば、原因の組み合わせがさまざまに異なるのであるが、同じ結果が現われてくるのが見られる。これらの諸結果を収斂させて統一的に理解するためには、否応なしに内的な指導原理に訴える必要が生じざるを得ないのである。

ところで機械論の終極の主張は、ラプラースの最も一般的に表現した考え方、「或る与えられた瞬間に、自然を活動させているすべての力と自然を構成している諸存在のそれぞれの位置を知る知性、しかもこれらの所与を解析学で処理し得るほど大きな包容力をもつ知性、そのような知性ならば宇宙の最も大きな物体の運動をも、また最も微細な原子の運動をも、同じ一つの公式のなかに含ませることができるのであろう。そういう知性から見れば何ひとつ不確実なものではなく、未来も過去も同様にその眼前に現前することであろう。」という思想や、ハクスリーがさらに同じ考え方をもっと具体的な形で表明した、「もし進化の根本的命題が真であるならば、すなわち生物をも無生物をも含む世界全体は、宇宙創成当時の星雲状態を構成していたもろもろの分子のもついろいろな力が、一定の諸法則に従って互いに作用しあった結果であるならば、現在の世界が当時の宇宙蒸気に潜在的に宿っていたこともやはり確かである。また完全な知性はこの蒸気の分子の性質を知ることによって、たとえば 1868 年における大英帝国の動物相の状態を、あたかも冬の寒い日に吐く息の水蒸気がどうなるかを言い当てるときと同じ正確さをもって、予言することができたであろう。」という思想に読み捉えられるごとく、未来と過去は現在の関数として計算可能であると考えるところにあるのである。かくして機械論的説明の本質は、「すべては与えられている」*tout est donné* と主張するところにあるのである。もちろんこうした機械論の学説であっても、時間については一見考慮が払われているように見える。しかしながら、その学説においてはただ

たんに時間とか過去とか未来とかいう言葉が符牒として利用されているに過ぎず、ベルクソンの発見した真の時間の内容である、流れる時間としての意義はまったくと言っていいほど除外されている。なぜならそこでは流れる時間の、未来を噛じり前進しつつ膨らんでゆく過去の連続的な進展、という真の創造的意義は剝奪されてしまっているからである。したがって、機械論において存在するのはたんなる符牒としての流れた時間であって、流れる時間は存在しないのに等しいのである。徹底した機械論は、実在の総体は永遠にわたって一括して措定されていて、諸事物の外觀上に示される持続は一切を同時に把握できぬわれわれの精神の無力さを提示しているに過ぎない、という形而上学に立脚していると言える。しかし、われわれの経験のうちに存在するものの中で最も明白確実なものである意識にとっては、明らかに持続はそれとまったく異なる様相を示すものである。われわれは持続を遡及し得ず、同時に反復のなし得ない一つの流れる時間として体験し観得する。それはわれわれの存在の根柢であるばかりではなく、さらにわれわれの交渉する諸事物の真実相そのものなのである。したがって普遍的数学の見通しをたてて、将来のすべてを現在の上に見るなどとわれわれを眩惑させようとしても無駄である。かくしてベルクソンは徹底した機械論を排斥するのである。

ついで極端な目的論、あるいは少なくとも何らかの内的な統一原理を認める立場についても、ベルクソンは反対の態度を表明する。目的論の徹底した形態の一つであるライプニッツのそれでは、もろもろの事物およびあらゆる存在はたんに既成のプログラムを実現して行くだけに過ぎぬもの、したがって世界の全過程のうちには原理上から言って、予見予知され得ぬものは何一つとして存在しないことが強調されている。しかし、世界のうちにおいて何ひとつとして不可予見的でかつ不可予知的なものが存在し得ないのであるとすれば、かくしていかなる新奇な発明もそしていかなる真的創造も存在し得ないとすれば、ベルクソンの発見になる流れる時間はこ

こでもやはり何のかかわりもなく、不要で無関係なものになるはずである。そしてさらにこの立場はともすれば外界の影響を忘却してしまう欠点があり、その内的な統一原理には初めから一つの方向が存在すると強調する見解に到ることになる。すなわち生命には調和に向かって進化する本質が存在する、という重大な誤謬に立ち到るとベルクソンは判断する。生命には実際のところ必ず不調和があるのである。個体はつねに己れ自身のことだけを先ず第一に考えるだけのものであるから、当然そこから生物の世界に闘争が生じてくるのは不可避のことになる。したがって、生命の世界の調和は前以って存在しているのではなく、かえって追求されるべきものとして後にあるのである。それは事実ではなくて、権利なのである。かくして目的論も機械論と同様に生命の一面しか見ていないことが明白であり、そのもっとも根本的なものを見逃していると言えるのである。目的論も結局は、「すべては与えられている」ということを、根柢において想定していると言わざるを得ない。しかしこのように考えられた目的論は、じつは逆転させられた機械論にほかならず、それは機械論と同一の要請を背負っているのである。ただ異なるところは、前者はその決定性を未来に置き、後者はそれを過去に置くだけの相違に過ぎないのである。目的論は現在の行動は未来の目的によって決定されていて、機械論は現在の状態は過去の要素や条件で決定されていると考えているのである。しかし、生命の躍動は決して前以って決定されているものではない。事実、両論は共にたんに決定された生命の状態だけを説くのではなく、その躍動の運動そのものを問題としてはいる。しかし機械論はその運動のうちにただ位置だけを抽象して捉らえ、目的論は順序だけを投影して問題とするに過ぎないのである。しかもその運動にとって最も重要で、本質的なことは動きそのものなのである。このことからすると、機械論は至らず、目的論は行き過ぎており、後者は過去の推進力に代わるものとして未来の牽引力をもってするに過ぎない、と言えるのである。

ベルクソンは生命の躍動 *élan vital* の動きそのものの在り方に対する両論の説明には満足できず、鉄のやすり屑の山の中に腕を手の先から一挙に突き通す例を使って、その本質を説明している。やすり屑は腕を手の先きから突き通して押し進めるのにつれて、互いに押しつけられ合って抵抗を増大させる。或る瞬間にその手は最初の力を使い果してしまう。ちょうどその瞬間になるとやすり屑の微粒子は、或る一定の形すなわち停止した手と腕の一部そのままの形に配列される。このとき手と腕は目に見えないままであったと仮定するとする。観察者はやすり屑がそんなふうに配列されている理由を、やすり屑の微粒子そのものや、その堆積の中に内在する力のなかに尋ねることであろう。或る人はおののおのの微粒子の位置を隣接し合う微粒子によって及ぼされる作用に帰するであろうし、また或る人は総体的な一つの計画が個々の要素的な作用をそのこまかい点まで支配していたと考えるであろう。前者は機械論者であり、後者は目的論者であろう。しかし実際は手がやすり屑を突き通す、というただ一つの不可分の単純な行為があっただけに過ぎないのである。微粒子の運動のきわめつくせない細部や、微粒子の最終的配列の秩序は、この不可分で単純な運動を言わば否定的に表現しているだけに過ぎないのである。それは抵抗の全体的形式であって、個々の積極的作用の総合ではないのである。それゆえ、微粒子の配列に「結果」という名を与え、手の運動に「原因」という名を与えるならば、われわれはかろうじて結果の全体が原因の全体から説明されると言い得るであろう。しかし原因の各部分に結果の各部分が対応することは決してないであろう。ここでは機械論も目的論も出る幕ではないと言うことである。ここではどうしても、或る独特の説明の仕方に頼る必要に迫られることになるのである。ここで提起された仮説においては、視覚と視覚器官との関係はおおむね手と鉄のやすり屑との関係に相当している。やすり屑は手の運動を素描し、その径路となり、それを限定するからである。

手の努力が大きくなれば、手はそれだけ一層やすり屑の奥深くへ突き進

む。しかし手がどの位置に停止しても、微粒子は瞬間的かつ自動的に釣り合いがとれ、相互に調整がつく。視覚と視覚器官の場合も同様である。視覚を構成する不可分で単純な行為が多少とも先きへ進むにしたがって、視覚器官の物質面をなす相互に調整のとれた諸要素の数に多少の相違が出てくるけれども、それらの秩序はどんなときにも完全無欠である。この点を十分注意して見落してはならないのであるが、秩序を生じさせる真の過程には諸部分などは存在し得ないのであるから、秩序は部分的ではあり得ないということである。機械論も目的論もこの点を考慮に入れ忘れている。普通われわれもまた、眼というような器官の驚くべき構造に目を瞠はるときに、この点を見そこなってしまっているのである。実際実現され得たのはこの秩序のほんの一部分だけに過ぎないであろう。その完全な実現は一種の天恵にほかならないのである、というような考えがつねにわれわれの驚嘆の底にはひそんでいる。目的論者はこの天恵を目的因ということでいっぺんに片づけてしまっている。機械論者はこの天恵が自然選択の働きで少しづつ得られると主張するばかりである。しかし、両者はいずれもこの秩序のうちに何か積極的なものを見て取り、したがってその秩序の原因のうちに何らかの分割可能なもの、すなわちあらゆる可能な完成段階を許すものを見ているのである。しかし事実としては、この原因の強度には多少の差があってもその結果はひとまとめのものとして、完成した形でしか生じ得ないのである。この原因が視覚の方向に進む程度に応じて、下等有機体の単純な色素群である眼点が生じたり、ヒトエカンザシの原基的な眼が生じたり、アルキオペのすでに分化した眼が生じたり、あるいは鳥のような驚くほど完成した眼が生じたりするわけである。しかしながら、これらの器官は複雑さの程度はまちまちであっても、必然的に同じような調整を示しているであろう。このような理由からして、動物の二つの種が互いにどれほどかけ離れていても、それは問題にはならない。もし双方が視覚への歩みを同じ程度に進めているならば、そのどちらの種にも同じような

視覚器官が認められるであろう。それというのも器官の形態は、機能の働きや作用がどこまで到達したかという尺度を、示すものにしか過ぎないからなのである。

視覚への歩みなどという表現には、目的性という脱皮すべき古い考え方たに再度戻ることが意味されている気配がある。もしこの歩みが意識的にせよ無意識的にせよ、到達さるべき目標を表象させるものであるならば、その気配の存在は是認されるであろう。しかしながら実のところは、この歩みは生命の根源的躍動 *élan originel de la vie* によっておこなわれ、この運動そのもののなかに含まれているのである。だからこそこの歩みは、さまざまの独立した進化系統に沿って見い出されるわけである。したがって、この歩みが生命の根源的躍動に含まれている理由、および如何にしてかという問い合わせに対しては、生命は何よりも先ずただの物質に働きかける一つの傾向であると答えられるべきである。この働きは少なくとも初步的な選択を含んではいる。ところで選択は前以って多数の可能的行動を表象することを想定している。だから行動の可能性が行動そのものの前に生物に対して、素描されていなければならぬ。視覚はそれ以外ではない。物体の目に見える輪郭は物体に対するわれわれの潜在的行動の素描である。もちろんこの生命の物質に対する働きかけの方向は、あらかじめすでに決定されているわけではない。であるから、生命がその進化の途上で撒きちらす形態の多様さには、予測予断を許さないものがあると言える。生命の仕事は物質のうちにできる限りの不決定性を挿入しようとするにあるのであるから、その働きはそれがいかなるものを生み出すかについては、前以って予期し得ずつねに多少とも高い程度において偶然性の性格を帶びてゐるのである。しかし、それを偶然であるといって哲学者が困惑するのは、彼らが最初から一つのプランやイデーを想定してしまっていて、それに反する事態が出現するのに遭遇して悲鳴を上げることにほかならないのである。それよりもむしろ最初から偶然を承認し、その上でどのようにして生

命は自己を実現してゆくかを探究すべきものであろう。目的論者の誤謬は生命に一つの方向を認めようとする点にあるが、しかし生命には方針はないのである。生命は進化とともに自ら自己を創造してゆくのみである。この点では機械論者も同様に誤謬を犯していることになる。彼らは環境をもって生命を決定する原理であると考えるからである。しかし環境は条件であって原理ではない。それは都会へと通ずる道とその道が敷かれている地形との関係に似ている。地形の高低や広狭がわれわれの進む道を決定はする。しかし前進するのはわれわれであって地形ではないであろう。かくして生命はちょうど鉄道の転轍機のように、あるいは幼稚園の先生が園児を指導するときのように、先ず自分を相手に合わせながら、何時まにか相手を自分の支配下に置くのである。

ベルクソンはこれまで論述してきたように、極端な形での機械論と目的論とは同時に排斥すべきものであると考えた。しかしいずれに対して攻撃の主点を置いたかと言うと、それはむしろ機械論に対してであった。それは彼自身の哲学的世界観が、伝統的な形での目的論とはもちろん相容れないものではあったが、しかし或る程度までは目的論的性格を持つものであって、しかも彼の言うところによればただそれのみが真正な目的論と呼ばれるべきものであったのであるからである。徹底的な目的論と同じように、ベルクソンの生命の哲学もまた有機的世界を一つの調和的全体とみなすものではある。しかし、ベルクソンの言う調和は決してひとの考えるほど完全な調和を意味するものではない。それはそのうちに多くの不調和を許容しているのである。と言うのは、生物界のそれぞれの種さらにはおののの個体すらも生命の全体的衝動 *l'impulsion globale de la vie* のうちから、ただいくばくかの躍動力 *un certain élan* だけしか保有していないで、そしてこのエネルギーをただひたすら自己自身にとってのみ有利になるように利用する傾向を保持しているからである。それがすなわち適応の現象にほかならないのである。と言うのも、種と個体とは全体のこととは考

えず、ただ自分自身のことだけしか考えないのであるからである。そこからして当然のこととして他の生命形態との間に闘争が生じなければならなくなるのである。したがって、全体の調和は事実においては存在し得ない。けれどもそれは権利において存在することを妨げられるものではない。なぜならば、すべての生命形態の根柢をなしている本源的躍動力 *l'élan originel* は一つの共通的躍動力 *un élan commun* であって、したがって現在では多種多様な生命形態に分岐しているものも、ひとがそれの本源へとより遠く遡源すればするだけより一層、相互に補足的なものとして見い出されてくるからにはかならない。それはちょうど、街衢の十字路に吹きつけた一陣の突風がそれぞれの方向に分岐して流れ込んで行くが、しかし各方向に分散したそれぞれの風の流れはすべて元は一つの同じ風にほかならないのと同様である、とベルクソンは譬えている。無限に多様な生命形態の根柢にも一つの共通的な生命の衝動が存在しているのであり、したがって生物界の調和あるいはむしろ相互補足性 *complementalité* は、そこにその根柢を見い出すことができるるのである。もっともこの調和あるいは補足性は、もろもろの状態のうちによりもむしろもろもろの傾向のうちに、大体として見て取ることができるに過ぎないのであって、とりわけ調和は生命進化の前方に存在するというよりも、むしろその背後に存在することが見い出される、とベルクソンは洞察している。それは生命進化における衝動の同一性 *une identité d'impulsion* に由来するものであるからであって、共通の憧憬 *une aspiration commune* に由来するものではないからなのである。

生命の躍動する方向に対して、一つの目的ないし人間的な意味での目的を措定することは徒労に過ぎないのである。一つの目的について考察することは、それは言ってみればただ実現されさえすればそれで良い、一つの既存の青写真を考えることと同じである。したがって要するにそれは、「すべては与えられている」すなわち未来は現在のうちに前以って見て取

ることが可能である、と想定することにほかならないのである。しかし、ベルクソンの生命の進展に対する明敏な洞察力によって解明されたところによれば、生命の進化および進展はもちろんそうしたものではないのである。生命は持続し発展するものである。それは不斷に新らしきもの、予見予知の不可能なもの絶えざる創造である。したがって、それはもとよりたんに既存のプログラムを実現するだけの、そして既定の道を進むだけのものでは決してないのである。このように見渡す態度において、ベルクソンは従来の伝統的目的論とは明確に袂別してしまうのである。しかし、もしひとつたび経過され終った生命の進展の道程が振り返えられるのであるとすれば、そこには一定の方向が認められそしてそこにはあたかも一つの目的の追求が存在していたかのように整理されることはできるであろう、とベルクソンは語っている。生命の進化の道程は、その道程を一步一歩たどって行くときのその動的な作用そのものに連動して漸次徐々に到達されてゆくものであって、言わばたどられることによって初めて生ずるものなのである。そしてさらに、その道程は実際にたどられるまではまったくもって微塵も存在していないものであるから、したがってそれは現在から未来の方向にかけては寸毫も予見予知され得ないはずのものである。であるからわれわれにはただ現在から過去の方向を顧みて、言ってみればそこに遡及的に目的論的な解釈を下すことがやっと許され得るに過ぎないのである。ベルクソンは自分の生命の哲学を、こうした意味で目的論的なものであると呼ばれることには少しも躊躇していない。すなわち目的論的であるということは、現在の照明に照らして過去を眺め渡すことによって初めてそこに成立してくる目的論であって、従来のそれのように一つの既存の目的あるいは予定調和を想定することによって、未来というものから生命の自由な創造的意義をことごとく剝奪してしまうがごときの目的論ではなかったのである。

(つづく)

注

- (1) 慶應義塾大学日吉紀要, 人文科学, 第 5 号.
- (2) 慶應義塾大学三田哲学会, 哲学, 第 91 集.
- (3) 慶應義塾大学日吉紀要, 人文科学, 第 6 号.

参考文献

1. Henri Bergson.
L'évolution créatrice. PUF
L'énergie spirituelle. PUF
La pensée et le mouvant. PUF
2. Seyyed Mohammad Haggi Matter, Life, Consciousness University Microfilms International.
3. Lawrence Westerby Howe The Idea of Endosmosis in Bergson's Philosophy University Microfilms International.
4. Connie Barnett Crank Price Consciousness and History in Bergson's Philosophy University Microfilms International.
5. Bergson Actes du colloque de Clermont — Ferrand, 17 et 18 novembre 1989. PUF
6. 沢瀉久敬編著『ベルクソン』中央公論社.
7. 市川 浩著『ベルクソン』講談社.
8. 中島盛夫著『ベルグソンと現代』塙書房.
9. 『ベルグソン全集』全 9 卷, 白水社.